詳説

大正七年　別府の町の米騒動

三重野　勝　人

一　米価騰貴と市民生活

米騒動　米騒動は、大正七年（一九一八）七月二十三日、富山県下に以下新川郡魚津町の漁村の主婦達が、米価騰貴に苦しみ、米の移出反対を叫んで次々に起こした〝越中女い一揆〟に端を発し、同年九月十二日、福岡県大牟田市と周辺の三池鉱山の騒擾が終わるまでの、五〇日間にわたる「米価の引き下げを要求する勤労大衆の街頭における集団示威あるいは騒動」である。その範囲は、一道三府三七県三八市一五三町一七八村（三六九箇所）にわたり、参加員数は一〇〇万（公式発表七〇万）、軍隊派遣箇所三府二三県（一〇〇箇所）に上る大規模な騒動であった。

米価の急騰　直接の契機は、全国的な米価の異常な騰貴と生活難にあった。消費者米価は、大正五年全国平均で一升（一・八リットル）一八銭であったものが、翌年には二五銭、七年に入ると一月三〇銭、七月三六銭、八月には四五銭に急騰する有り様であった。県下もこれとほぼ同じであった。次の資料は、五人家族・月収三〇円・米価一升五〇銭の場合、米価の高騰が市民生活に与える影響を試算したものである。

今五人家族の家庭で一人平均四合食うとしたならば、一日二升一ヶ月六斗、代金三〇円を要する。斯て月給三〇円の五人家族にありては漸く米代で、衣食住はもとより薪炭副食物さえも買うべき余裕を有せぬ。（中略）思えば恐ろしい時代が来たものだ。

（大分新聞大正七年八月十一日号）

当時月収三〇円の家庭がどの程度の裕福度にあったかについては、司法省の米騒動の被検挙者七〇一三人に関する調査があるが、それによればこの層は、安全・稍裕・余裕なしに次ぐ窮迫した層にあるとされ、被検挙者の四六％はこの層に属していたとされる。

諸物価の高騰　米価の高騰に加え、大戦景気にともなう諸物価の高騰も市民生活を圧迫した。『大分新聞』八月一三日号は大分市内の諸物価の実態を次のように伝えている。

この程から牛肉の値が更に一〇銭を上げてロース七五銭となり、以下七十銭、六十五銭、五十銭と五銭落ちの各種となった。鶏肉は五銭値上げの七十五銭、六十五銭と

なった。（中略）野菜の暴騰はなお一層甚しい。平常三厘から五厘で買えた茄子一個が三銭乃至四銭、（中略）魚の値は（中略）概して倍値以上超えざる日とてはなく――。

なおこのような諸物価の騰貴には、この年七月県下を襲った暴風雨も影響している。

米価騰貴の背景　米価の騰貴の背景にはどのような事情が存在したのであろうか。それには次のような諸事情が考えられる。

①大戦景気による都市人口・労働人口の膨張による米穀需要の増大。

②養蚕業の発展などに伴う農業収入の増加により農村米穀消費量の増大。

③全国的な不作による減収

④大戦による外国米輸入の減少

⑤地主・米穀商による米穀投機の盛行。

県下においてもこのような要因の発生は十分にうかがえる。

別府町の発展　大正中期までに都市化の進んだのは大分市と別府町である。大分市では明治末から大正初期にかけて大分紡績（のち富士紡績大分工場）などの軽工業が発展の緒につき、表(1)に見られるように人口が急増、大正二年から同七年の五年間に約五〇〇〇人の増を見ている（『大分市誌』昭和一二年）。他方別府町は、折からの大戦景気を背景に、保養・行楽地として第三次産業が発展し、また鉄道路線の整備がこれに伴い、表(2)に見られるように、年を追って人口が急

表(1)　県内・人口1万人以上の市町村人口の推移

市町名	大正2年(1913)	大正7年	増　減
大　分	38,905	43,842	＋ 4,937
中　津	16,429	12,508	－ 392
高　田	10,418	10,777	＋ 359
佐賀関	9,376	11,486	＋ 2,110
臼　杵	21,380	20,779	－ 601
佐　伯	10,061	9,166	－ 895
日　田	11,310	11,203	－ 107
東大野	10,907	10,474	－ 433

（「統計から見た大分」より）

表(2)　別府町人口統計

年次	現在戸数	現住人口	対前年比増減	備　考
明治41	3,120	14,045		豊州線立石～大分間開通
大正2	4,444	21,970	＋ 7,925	
3	4,556	22,578	＋ 608	第1次世界大戦
4	4,622	22,935	＋ 357	大戦景気（～大正7）
5	4,668	23,387	＋ 452	
6	4,742	24,044	＋ 657	
7	4,975	25,663	＋ 1,619	シベリア出兵・終戦
8	5,086	26,084	＋ 421	ベルサイユ講和会議
9	5,188	26,321	＋ 237	
10	5,916	28,178	＋ 1,857	11年シベリア撤兵

（『別府市誌』昭和8年版より）

増している。因みに明治四十四年から大正七年までの八年間の人口増は、実に一万一六一八人を数えている。参考までに別府駅の降車人員を表(3)で見ると、大正七年前後の降車客は二〇万に迫っており、降船客と合わせれば四〇万に達し、また入浴客も一〇〇万に達するといわれた（「県政要覧」大正九年）。なお県人口は、大正二年九二万六九三六人、同七年九二万〇九九四人で停滞を示している。

表(3)　別府駅降車人員統計

年次	降車員数	対前年比増減	
大正元	179,300		明治44年　豊州線立石～大分間開通
2	186,605	＋　7,305	
3	193,317	＋　6,712	第１次世界大戦
4	195,340	＋　2,023	
5	216,358	＋　21,018	日豊線大分～佐伯開通
6	279,263	＋　62,905	大湯線大分～小野屋間開通
7	309,399	＋　30,136	米騒動
8	360,731	＋　51,332	
9	373,359	＋　12,628	戦後恐慌
10	589,474	＋　216,115	九州沖縄８県共進会

（『別府市誌』昭和８年版より）

なお参考までに、大正十年前後の泉都の様子を紹介しておこう。

（別府温泉は）明治七年大分県令森下景端、県費を支出して別府、浜脇の浴場を改築せしむ。かくて来浴者日に加わり、（中略）今や泉源一千百余箇所ありて、一昼夜の湧出量約三万石に及びて、流れて湯の川となり、海浜は所謂砂湯をなす。浴客亦百万人を超えんとす。盛んなりといふべし。

（大正十年『大分県案内』）

養蚕業の発展と農村の変貌　大戦期における農村米穀需要の増加は、米国の生糸需要の伸びから養蚕業が盛んになり、農家収入が増大したことが背景にある。県下の養蚕農家戸数は、大正七年四万一七〇四戸を数え、大正四年からの三年間に一万五八三七戸の増を見、また産繭量も大正七年七万五三六六石と、同期間に三万六三七二石の伸びを示している。この間繭価も石当たり三八円から八〇円と高騰し、片倉製糸など大手企業が、養蚕農家・同業組合と集荷契約を結び現金引き換えで生糸を買い上げたので、農家の生活水準は一時著しく向上した。『真玉町誌』には次のような回顧談が記されている。

この頃養蚕の盛んであったことはいいようもない。お蚕さまさまでいなかの百姓も活気があった。地域の農家はほとんどが蚕を飼い、この五年間あまりは家計の最も楽な時代であった。新しい着物を着て米の飯を食べ、生活はすっかり変わった。村内には豊中組、片倉組など養蚕組合の形で生産競争が盛んであった。

米穀投機とシベリア出兵　以上のような都市・農村の変貌による米穀需要の増大は、県内産米の移出減をもたらした。第(4)表を見ると移出検査高は、大正六年には三〇万石を切り、ほぼ同額の収穫高である大正四年に比しても明らかに減少傾向を示している。ことことは、本県が米国移出県であったことから、そのまま全国的な米穀供給不足の背景をなしたことを示し、米騒動が、全国の都市・農村を包含した諸状況の上に起こったことを立証している。

表(4)　県内米穀作付・収穫・移出高累年比較表

年次	作付反別	収穫高	移出検査高	備　考
大正 4	55,412.4町	984,982石	304,649石	
5	56,016.9	1,117,206	380,632	
6	56,561.2	984,684	275,202	
7	57,212.4	905,771	171,401	7月暴風雨

（大正10年「大分県案内」による）

米穀投機については、その背景にはインフレの昂進や米穀需給事情などがあったが、その中心舞台は米穀取引所であった。県下には明治三十七年以降取引所はなかったので、大規模な投機は行われなかったが、臼杵の指原商店など、二、三の大米穀商店が大阪の鈴木商店などと結び、大量の米穀を移入して利ざやを稼ぐなどのことはあった。また小規模ではあるが、小売商などによる売り惜しみなど、投機類似行為は県下各地に散見された。このほか不正行為も少なくなく、「外米を内地米に混入」（国東）したり、「白米に湿気を加えた」例や「升切れを生ずるものが多く、甚だしきは三合四合に及ぶ」例（大分・「大分新聞」大正七年八月十四日号）など、消費者の憤激をかうような事態も生じた。

このほか投機行為を誘発した県内の特殊事情としては、表(4)に見られる七月に県下を襲った暴風雨による打撃や、シベリア出兵兵士の大分市内分宿による需給の乱れなどもあった。『九州日々新聞』は、この間の事情を次のように伝えている。

大分市にては米穀不足勝にて、かてて加えて時局にて多人数入りこみたると、従来同地需給米は田舎の馬に依り輸送し居れど、馬匹も徴発せられ、殆ど輸送機関途絶せり。これが為、持米大欠乏を告げ、県庁にては打ち捨て置くわけにも行かず――。

文中の「時局」とは、大正六年（一九一六）に起こったロシヤ革命によってソヴイエト政権が誕生したことに危機感を抱いた列強が、革命干渉を図ってシベリアに出兵、日本もこれに呼応したことを指す。大分連隊も出兵するが、この際召集された兵員が多数市内に分宿、また馬も徴発されたことから、思わぬ影響のでたことを新聞が報じたのである。

ともかくこのような諸要因が重なって、県下にも米騒動が波及するようになる。

二　別府と臼杵の米騒動

九州で発生一番の別府町の米騒動　県下の米騒動、八月十三日夜から十四日未明にかけて起こった別府町の米騒動を代表とするが、それを見る前に近畿以西の動きをたどってみよう。

発生日順に見ると、八月九日広島、十日大阪・京都・岡山、十二日兵庫・奈良、十三日山口、十四日香川・愛媛、十五日高知の順となり、九州では次の状況で展開している。九州各県の騒動発生件数は、福岡二四件、熊本七、佐賀六、長崎・宮崎各三、鹿児島・大分各一で、福岡県は質量ともに激烈を極めた。

まず八月十四日から十六日にかけて門司で市民三〇〇余が米屋・醤油屋・酒屋などを襲ったのを皮切りに、小倉・戸畑・炭鉱地帯へと波及し、九月中旬に至るまで連日のように騒動が続き、一九カ所に軍隊が出動して鎮圧している。

九州で最も早く騒動の発生したのは別府町であった。『九州朝日新聞』（八月一五日号）はその模様を次のように伝えている。

大分県別府町にては、十三日午後三時頃より、「米の廉売を希望する者は今夜港町に集まれ」と貼紙する者あり、其の筋に於いて警戒中、果然九時にいたり港町魚市場付近に集まる者約五、六百名に達し、形勢不穏を極むるより、尾野警察署長より説諭をなしたるに、一応解散の模様なりしも、再び盛り返して七、八百名となり、（中略）片端より寝に就きたる米穀商を叩き起こして米価引下げを迫り、其の一隊（某）町（某）精米所を襲い、瓦礫を投じて門燈を破壊し、戸を打破り、遂に二十五銭売出しの貼紙をなさしめ、（中略）十四日午前零時三十分藤沢保安課長巡査二十余名を率いて電車にて急行し来たり、別府署に急援し、十四日午前一時某を含め数十名を引致したるため、未明に至り、一応鎮静を見たるも、（中略）為に米穀商は震え上がりいず何れも二十五銭と掲示せり。

他の新聞もおおむねこれと類似した内容を伝えているが、大正七年の「別府町事務報告」（別府市役所蔵）にも次のように記されている。

八月十三日夜多数ノ集団米穀商ヲ襲イテ、不穏ノ行為ヲ演出セシ不祥事アリ。

十四日以後の騒動の経過は、新聞などへの関連記事掲載禁止措置が取られたので判然としないが、『大分県警察史』に、以後一週間にわたって厳重な警戒をしいたとあるので、他の資料などと勘案すれば、散発的な動きは暫時続いたものと考えられる。

臼杵町と大分市の状況　別府町の騒動の影響を受けて、臼杵町でも騒動に近い事態が発生し、また大分市でも不穏な状況が継続した。

大正七年八月、北海部郡長より県内務部に提出された「在米ノ動静及ビ地方民心ノ状況」に関する報告（法政大学大原社会問題研究所蔵）には、騒動に至る経過も含め、次のような臼杵町の状況が記されている。

一面米価ノ暴騰ハ一般人民ニ困厄ノ声ヲ発セシメ、本月中旬ニ入リ一層ソノ声ヲ高クスルニ至リ、各地ニ貼紙ヲナシ、米穀商ニ対シ白米一升三十五銭以下ニ価格引下ゲヲ要求スル等、形勢稍不穏ノ兆アリ。（中略）郡役所警察署町役場ハ協議ノ上米穀商ヲ召集シ、米価引下ゲニ関シ反復諭示シ、（中略）結果一升四十八銭ニ暴騰セル白米ヲ三十八銭ニ引下ゲ、救済的販売方ヲ申シ出ヅル米穀商ヲ即座ニ出スニ至レリ。之ヲ動機トシテ三十七、三十五銭ト（甚ダシキハ二十五銭ニ迄）同業者間競争的安価販売ヲ決行シ、店頭並ビニ広告ヲ為ス等、為ニ一層民心ヲ擾乱セシメ、遂ニハ去ル十四、十五日ノ同志集合ヲ見ルニ至リシモ、幸ニシテ事故ヲ生ゼズ追散スルニ至レリ。

「大分県警察史」によれば、この夜公園で開かれた集会には、三名の警官が私服でまぎれこみ、唐人町・掛町・平清水の三方面に群衆を誘導して騒動を未然に防いでいる。

一方県都大分市では、シベリア出兵兵士が分宿中のため警戒は厳重を極めたが、別府町の騒動が伝わると、十四日の朝から市内に「米を三十銭にせよ。然らざれば今夜別府町の如き暴状を受くべし」の貼紙があり、「米商側は恟々として急遽家財を取纏め」、万一に備えるという事態も生じ、「今日一日の状態如何に依りては如何なる不祥事を演ぜんやも量り難き不穏の状態」（「関門日々新聞」八月十五日号）が見られた。しかし、十五日から白米の廉売も始まり鎮静に向かったようである。

三　米騒動の背景と別府町の対応

湯の町別府の変貌　米騒動の経済的背景については既に見たが、ここでは社会的な背景となる地域社会の実相、騒動の

主力となった階層などについて、別府町を例に考えて見たい。

全国的に見ると、主力となった階層は自由労働者や職人などの前近代的な生業に従事する労働者で、関西の場のように被差別部落民が、また北九州のように工場労働者や炭鉱労働者が中核となった場合もあった。

県下の場合は、騒動参加者に関する確かな資料はないが、騒動の発生した当時の別府町の様子や職業別の調査資料によって、社会的な背景に迫って見たい。

表(5)　大正4年「職業大別調査」

職業別	戸　数	職業別	戸　数
貸座席	65(芸娼妓500)	大　工	250
飲食店	93	竹細工	145
料理屋	41	左　官	60
宿　屋	176	木　挽	30
酒醤油店	152	仕　立	36
雑貨商	92	農　業	470
菓子果実	215	漁　業	122
理　髪	140		
古物商	76		
石　工	130		

(「別府町統計一班」別府市役所蔵より)

この調査によれば、会社組織の企業は銀行を除き一六社しかなく、他は家族労働に支えられた個人経営であった。これらの職業は、貸座席遊客七万、入湯客一〇〇万(大正八年・「大正九年県政要覧」)といわれる保養・歓楽の町別府を一部反映しているが、この職業構成と米騒動とは、他県の実態に照らしてみても全く関係がないと考えられる。むしろ舞台となった港町(旧別府桟橋)付近の様子を伝える次の資料が参考になりそうである。

電車が九電前から桟橋前まで延長された大正年間には、桟橋から北は広い国道がヤシ連中のかせぎ場になった。天然砂湯のカーブから児玉旅館・鶴田ホテル・愛媛屋の前あたりまでぎっしり屋台の店が並んで(中略)入湯客がぞろぞろ(中略)集まった。(中略)並んでいる品は、八つ目うなぎ・ガマの油・薬草・白髪染・忍術の本・反物・モグラ売り・源水のコマ回し・ヘビ使い・茶碗の投げ売りなどで、(中略)それを声音おもしろく売りつけようとする露店街は別府名物といわれ、入湯客は昼も暇さえあれば店から店を冷やかして歩いた。屋台に人だかりがしている中を船名の入った旗をかついだ船問屋の宣伝員が、ハッピ姿でリンを打ちふりながら、〝第一宇和島丸、馬関行き〟(中略)とか大声をはりあげふれて歩いた。(是永　勉『別府今昔』)

他方の騒動の中心であった松原公園付近の様子については、次の資料がある。

(松原公園)

別府駅の南方六町、浜脇駅の北五町にあり、当町第一の歓楽場にして、噴水池を中央に、劇場、活動写真、興行物、玉突場、囲碁倶楽部等軒を並べ、浴客雑踏せり。

松涛館　別府唯一の劇場、園内中央にあり。

豊玉館　中浜通り三丁目にあり、常設活動写真館。

松栄館　常設館写真館、松原通りにあり。

松原座　寄席、松原通りにあり。

なの字館　寄席、楠温泉付近にあり。

別府館　寄席、竹瓦温泉の横手にあり。

交通網の発達　米騒動拡散の一因に交通網の発達がある。大正七年当時の県内交通網は次のようであった。

（大正十年『大分県案内』による）

●鉄道関係

日豊線　小倉～大分　明治四四年　（当時豊州線）

大分～佐伯　大正五年

豊肥線　大分～犬飼　大正六年

大湯線　大分～小野屋　〃　（のち久大線）

九水鉄道　大分～別府　明治三三年（電鉄）

●海上交通（汽船乗降人員・大正八年一四万一〇〇〇人）

別府港定期船（別府・大阪間二四時間）

△別府・大分～大阪　紅丸ほか　隔日一回出航

＊四国経由（日出↓守江経由　毎日）

中国経由（柳井↓広島↓呉経由　毎日）

△別府・細島～大阪　毎日一回出航

△別府～宇和島　〃

△別府～尾道　〃

別府町の米騒動が八月十三日夜、九州で最も早く起こった背景にこのような交通事情のあったことが推察されるが、ちなみに関西・西日本の騒動は、九日広島、十日京都・大阪・兵庫の順で起こっている。この両者のいずれもが別府町の騒動に影響したと考えられるが、ことに産業、商業・交通の中

大正8年県下主要港湾動静表

港区分	隻数	トン数
別府	11,570	2,627,720
佐賀関	13,450	2,512,724
守江	57,770	1,348,000
日出	3,504	1,181,280
大分	5,711	1,168,985
臼杵	6,621	809,133

（大正10年『大分県案内』より）

心で米騒動のムードを作ったといわれる京阪神の騒動が大きく影を落としたと考えられる。こうして騒げば米価が下がるという噂はなまなましい騒動の見聞とともに、直接京都・中国方面から別府に伝播し、騒動を誘発したのであろう。このほか、県北や陸の孤島と言われた国東半島で長期にわたり不穏の状況が続き、門司の暴動に参加せんとする者の旅行阻止」(『大分県警察史』)などに警察が労力を費やした背景には、周防灘を介した中国・北九州方面との交流を考慮しなければならないであろう。

最後に、季節的な要因や年中行事などの影響も指摘される。不快指数の高い夏、夕涼み、神社の祭礼、盆会などの時期は人々が集まり語り合う機会が多い。それに加え、出稼ぎ労働者のUターンによる情報の伝達もある。いずれにしろ騒動のムートを作る要因にはなるであろう。具体的な資料に乏しいが八月十八日の国東署の対応で「盆会に関し消防団、青年団などと協議取締をなす。」(同前)とあるのは、そのことを物語る一例である。

政府・大分県の対応　政府は大戦景気による物価騰貴に直面して、大正六年九月暴利取締令を公布、同七年四月には米価対策として外米管理令・輸入令を公布、次いで七月には臨時外米管理例を発し、また別に内地米一〇石以上の所有者の届け出を命じた。また米騒動高揚期には各府県知事に対し、米騒動に関し誇張又は扇動的な記事なきよう新聞社に諭旨することを指示、次いで十四日には、「騒動ニ関スル記事ハ当分ノ間安寧秩序ヲ紊スモノト認ムルニ付キ、一切掲セザルヤウ」通達した。この措置には警告前に印刷したと認められるものは「執行ヲ勘酌サレタイ」との除外例があり、これによって本稿に引用した八月十六日付け、別府町米騒動の記事が日の目を見たのである。

このほか政府は、八月十六日に穀類収用令を公布、一千万円を支出して穀類買い入れの措置を取り、また皇室からは賑恤下賜金三〇〇万円を下賜した。

大分県ではこの春四月十八日に、知事新妻駒五郎が次の告諭を発して射幸・投機などの行為を戒めた。

時局以来一般物価高騰を告ゲ(中略)為ニ生計逼迫ヲ蒙ル者尠ナカラズ(中略)。米価近時ノ暴騰ノ如キ取引、市場各種ノ原因ニ基クハ勿論ナリト雖モ供給者ノ売惜シミモ一因タルヲ失ハズ(中略)、県民ハ宜シク産業ニ精励シ浪費ヲ節シテ資材を増殖スルト共ニ深ク射倖ヲ慎ミ投機ヲ戒メ(中略)、需給ノ円滑、物価ノ平準ヲ期シ社

会経済ノ繁栄ニ資センコトヲ努ムベシ。（「大分県報」）

次いで七月二十四日には、政府の措置に対応して一〇石以上の保有米の届け出を命じ、また賑恤下賜金・県下賜分五万二千円を市町村に配分した（同前）。さらに八月十日に、門司の三井物産及び鈴木商店にサイゴン米二七〇〇袋を発注（「九州朝日新聞」八月十二日号）、八月中に計八七〇〇袋を購入、以下十一月、十二月と引き続き外米を輸入した。この外米は一升＝二〇銭前後で廉売し、廉売差損については、東京地方富豪の寄付配分金四万八〇〇〇円及び県内篤志家の寄付金を充当した。なお貧困者には、外米廉売割り引き五銭券を発行し一三円で販売した。この廉売券総数は、一一万枚にのぼったといわれる。（以上「大分新聞」九月十一日号）

別府町の救済策　別府町では八月十五日に臨時救済委員会（一四名）を結成し、救済資金の募集方法、募集分担及び区域、外米売り出し方法及び場所などを決めて救済に当たった。「別府町事務報告」（別府市役所蔵）によってその概要を紹介しよう。

一、大正七年「大分県速見郡別府町事務報告」

ハ、救済

三、臨時救済

大正七年八月十三日夜多数ノ集団米穀商ヲ襲ヒ不穏ノ行為ヲ演出セシ不祥事アリ。コレ他ナシ、無謀烏合ノ徒輩ガ一時ノ好奇心ニ煽ラレ、他地方ノ狂態ヲ軽挙実現シタルニアラザルカ、要スルニ前代曾テ類例ナキ突飛ノ米価ニ苦シミ、生活難ノ極前後ノ思慮ナク事ノ茲ニ出タルニ外ナラザルベシ。此場合ニ於ケル応急策ヲ町トシテ講ゼシメ、大正七年八月十四日町会議員各区長ヲ召集シ、小野別府署長臨場、諸般事項を協定シ、之ヲ普ク町民ニ徹底セシムルコト、同時ニ今後苟モ斯ル暴挙ヲ再演セザル様予防警戒等怠ラザリシ（後略）。

臨時救済ニ関スル事務ノ大要ヲ掲グレバ左ノ如シ。

一、大正七年八月十五日町会閉会後ニ協議会ヲ開キ、細民救済資金募集方法ヲ協定シタル結果委員（一四名・筆者註）ヲ町長ニ於テ推薦嘱託セリ。

まず募金については町内を以下の三区分け募金した。実績は次のようであった。

《募金と徴収実績》

区域＝流川以北（担当委員五名）・流川以南（同五名）・浜脇（同四名）

合計募金額　七、四八一円五〇銭

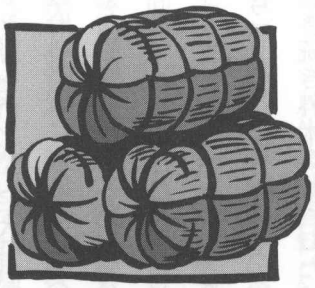
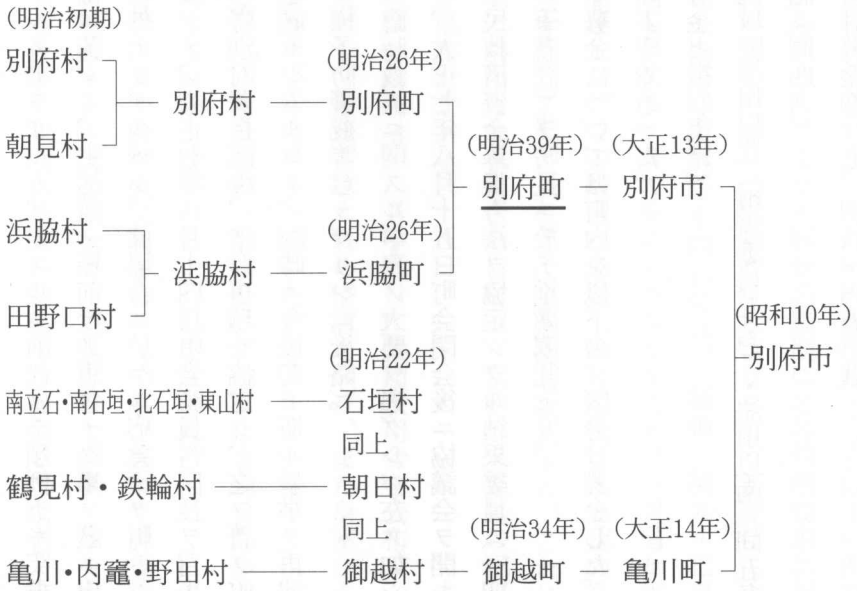
また外米の廉売区を次の一七カ所とし、それぞれ売出人を定めて廉売を行った。

（野口・行合町）、（北町）、（朝見・八幡・原）、（田の湯・不老町）、（海門寺・北浜）、（梅園町・流川・湊町）、（南上・中町・秋葉）、（南下・中浜・南正）、（松原）、（住吉・向浜）、（新町・西町）、（楠浜・楠町）、（魚町・薬師町）、（上野町・東中町・東町）　＊ただし三カ所は再掲のため削除

この売り出し区域は、ほぼ別府町全域を網羅しており、町当局が事態を如何に深刻に受け止めていたかを物語っている。

なお参考までに別府市域の町村行政区画の変遷を図示すれば次のとおりである。

図を見ると、米騒動時の別府は、明治三九年の別府町域となる。



別府市町村変遷表